

2019年全国カート選手権 FS-125部門/FP-3部門 西地域第5戦  
2019年ジュニアカート選手権 FP-Jr部門/FP-Jr Cadets部門 西地域第5戦 [JAF公認No.2019-4026]

開催日：2019年9月14～15日 開催場所：中山カートウェイ 格式：国内/準国内 主催：株式会社山陽スポーツランド [団体登録No.公認83301]

フォト/遠藤樹弥 レポート/水谷一夫

## 女子高生カッター・森岡泉美選手がFP-3部門で快挙!

2018年の地方選手権では2回の表彰台を獲得した森岡選手。今シーズン初の表彰台を優勝で飾ることができた。



**2**019年全国カート選手権シリーズの西地域を締め括る第5戦は、中山カートウェイでの開催だ。決勝日の空は快晴。最高気温が33度を超える真夏さながらの暑さの中、決勝はFS-125部門、FP-3部門とも30周の長丁場を走り抜く過酷なレースとなった。

出走22台の盛況ぶりを呈したFP-3部門では、17歳の女性ドライバー森岡泉美選手が、予選ヒートで藤井亮輔選手の攻撃を気迫溢れる走りで跳ね返し、決勝のポールを獲得した。藤井選手はセカンドグリッドだ。

そして決勝が始まると、森岡選手はスタートで最強のライバルと目する藤井選手との間に3台のマシンを挟むことに成功。背後で過熱する2番手争いにも乗じて、着々とリードを広げていった。レース中盤からキャブレターを濃い目に調整してアクセルを踏みつけ、全力でゴールを目指す森岡選手。その独走を阻むものは、最後まで現れなかった。

昨年からのFP-3部門参戦で、待望の初優勝。加えて女性ドライバーとして全日本カート選手権史上5人目の勝利を達成。森岡選手はバ



シャンパンを全身に浴びせられながらも、嬉しさのあまり笑顔が絶えない森岡選手。



FP-3部門/1.左から2位の岡本旬司選手、1位の森岡選手、3位の宮地健太郎選手が表彰台に登壇。2.あと一步届かなかった岡本選手だが、1位の森岡選手を笑顔で祝福した。3.昨年と同じ展開で3位を獲得した宮地選手。



**FS-125部門** / 4.表彰台は左から2位の日吉太一選手、1位の嶋田隼人選手、3位の津野熊凌大選手という顔ぶれ。5.2位の日吉選手は初表彰台を獲得。6.3位の津野熊選手も初表彰台となった。7.嶋田選手が中山を制したこと西地域ポイントランキング2番手に浮上、タイトル争いは東西統一競技会へ持ち越された。



**FP-Jr部門** / 8.9.4台一丸の先頭集団は、序盤戦を迫隆眞選手が、中盤戦を安藤哉翔選手がリードし、終盤には加藤大翔選手がトップに立った。加藤選手はここからゴールまで後続を背後に封じ込め、歓喜のジュニア選手権初優勝を飾るとともに、西地域ポイントリーダーの座を堅持した。これで混戦の西地域は、5戦すべてでウィナーが入り替わることに。10.2位でフィニッシュしたのは、6番グリッドから浮上して優勝争いに加わった井田頼希選手。11.前戦のウィナー安藤選手が3位でフィニッシュ。12.入賞の皆さん。



**FP-Jr Cadets部門** / 13.4番グリッドからポジションアップしてきた佐藤ころ選手が折り返し点で先頭に浮上するも、松本選手にまたも初勝利を阻まれたが、3戦連続の2位獲得。14.タイムトライアルで一番時計をマークした白石樹望選手が3位に入り、表彰台の2席を女性ドライバーが占める結果となった。15.16.25週の決勝は4台が一列に連なるホットな戦い。序盤からリードする松本琉輝斗選手が、中盤でトップを明け渡すも、残り6周でトップの座を取り返し、今季4勝目となる3連勝を果たした。17.入賞の皆さん。



ンザイでチェッカーをくぐると、続けて右手で高々とナンバー1サインを掲げ、車検場でマシンを降りるやジャンプしながら家族とハイタッチ。喜び爆発のあとで「落ち着いたら涙が出てきました」と、森岡選手は明かす。

この週、森岡選手がレース出場のため欠席した高校では、文化祭が行われていた。そこで自分のクラスが金賞を獲ったとの吉報が、レース前の森岡選手の下に。「だったら私も優勝して“金”を重ねようと思ったんです」と。今季の不振を吹き飛ばす快走劇は、こんなモチベーションにも支えられていたのだ。

2位は岡本旬司選手。タイムトライアルで9番手に留まると、予選ヒートから走り方をガラリと変えて「優勝を確信した」というほどの好調さを取り戻し、快調にポジションを上げていった。だが決勝では、セカンドグループの熱闘に追い上げを遮られ、逃げる森岡選手を捕らえることは叶わなかった。

藤井選手は3番手でゴールしたのだが、フロントフェアリングのペナルティを受けて9位に転落。7番グリッドから挽回を演じた宮地健太郎選手が繰り上がりで3位となり、今季2度目の表彰台に上がった。

FS-125部門では、今回と同じ中山での第3戦を制した嶋田隼人選手が、この日も他を上回るスピードを見せつけた。

嶋田選手は、まずタイムトライアルでトップタイムを叩き出すと、予選では序盤から後続を引き離して決勝のポールに着いた。そして決勝でも、数少ない不安要素だったスタートをうまく決めると、4周で約1秒のリードを築いて独走。最後は後続を6秒以上も引き離し、一日を通じて一度もトップの座を譲ることのないパーフェクトウィンを果たした。

「前回の中山大会で勝っているのでプレッシャーもあったけれど、練習日から調子が良くて、決勝ではマシンを労わる余裕もありました」と

語る嶋田選手は、これで今季2勝目、さらに中山大会2連勝。ポイントランキングもひとつづたがって2番手となった。

2番グリッドの日吉太一選手は、スタートで津野熊凌大選手の先行を許したが、やがて津野熊選手を抜き返し、その後は背後にギャップを広げて2位でフィニッシュ。体力を強化して臨んだ一戦で、同部門3年目の初表彰台獲得に成功した。津野熊選手は再逆転を許し、やや悔しさの残るレースとなったが、背後に連なるマシンとの3位争いに討ち勝ち、デビューイヤーで初の表彰台に立った。

居附明利選手はセッティングが決まらず苦しいレースを5位でまとめ、ポイントリーダーとして東西統一競技会に挑むことに。前戦で初優勝の奥田もも選手は予選で失格、決勝では目の前のアクシデントを回避してスピンと散々なレースになったが、西地域ランキング3番手でチャンピオン争いに留まった。